

準備委員会企画シンポジウム 2

小学校外国語活動において留意すべき児童の心理的側面

企画者・司会者	内田 恵 (静岡大学)
企画者・話題提供者	矢野 淳 (静岡大学)
話題提供者	石濱 博之 (上越教育大学)
	中村 典生 (岐阜市立女子短期大学)
指定討論者	増田 賢 (御前崎市立浜岡北小学校)
	岡澤 永一 (暁星小学校)

企画の趣旨

小学校の外国語活動が、平成23年度より高学年で必修化される。その準備として既に外国語活動を授業に導入し始めている小学校も少なくない。ここでは小学校の外国語活動において留意すべき児童の心理的側面に焦点を当てて、教育効果を高める方策について議論した。

児童の意識と聴解力の結果からどのような授業を組み立てるか

石濱 博之

(1) 児童の英語活動に対する意識から捉える

石川県かほく市は平成18・19年度文部科学省委嘱「小学校英語活動地域サポート事業」の「児童が楽しく取り組む英語活動の在り方を求めて」という課題で英語活動に取り組んだ。その狙いは「英語大好き100%」としたが、達成されたかどうかを検証するために、かほく市の小学校3年生から6年生までの児童を対象として平成19年2月初旬に意識調査を実施した。その結果は、「好き」と「楽しさ」の関係について、児童は「とても好き」であれば「とても楽しい」と思っている。その反対に、「嫌い」であれば「楽しくない」と思っている ($\chi^2(9)=1896.537, p<.01$)。さらに、「好き」と「わかること」「聞くこと」および「話すこと」の関係についても、児童は「好き」であれば、「わかること」「聞くこと」および「話すこと」に肯定的な反応を示した。「英語大好き100%」にするために、かほく市の小学校は授業づくりを考慮した。

(2) 児童の聴解力の結果から捉える

平成17年度から糸魚川市立N小学校は、年間活動計画、すべての指導案作成、教材開発、授業実践、および評価を含む35時間の英語活動を実施した。平成18年6月に、N小学校で35時間の英語活動を経験した児童とN小学校以外の児童が、中学校1年生になったときの聴解力の調査(「児童英検2級」の模擬テスト)を実施した。「35時間の英

語活動を経験した生徒」および「その他の英語学習経験をした生徒」は、「英語学習経験のない生徒」と比較して聴解力の結果がよい ($F(2, 182)=16.314, p<.01$)。同じ参加者で、平成19年7月下旬(中学2年時)にも継続して聴解力の調査を実施した。時間の経過とともに中学校英語教育での指導による効果加わると考えられるが、中学校2年時でも中学校1年時と同様の結果を得た ($F(2, 182)=18.828, p<.01$)。

(3) 意識と聴解力の側面から授業の枠組みを捉える

以上(1)および(2)の結果を勘案して、「授業づくり」を考慮したい。1時間の授業の枠組みを固定化して授業実践に臨めば、児童が外国語活動(英語活動)に取り組みやすくなる。

小学校英語における態度面とスキル面の関係

中村 典生

本発表は、岐阜県A小学校の4年生から6年生合計199名を対象に実施した2種類のアンケートをもとに、小学校英語における児童の態度面とスキル面の関係について述べるものである。アンケート1は好きな活動、やりたい活動、好きな科目などを問うものであり、アンケート2は独自の語彙習得モデルに基づいて作成され、児童がどのような語彙技能(例えば聞いて理解する技能など。6種類ある)を身に付けているか、ということ調査するものである。本発表のまとめは以下の通りである。

(1) 学年が上がるに従い英語の位置付けが変わる。——これは英語が好き、と答えた児童が、その他のどのような科目が好きと答えているか、ということに注目したものである。クラスター分析を用いた結果、4年時では英語は図工や体育と同じクラスターに属しているが、5年生では体育と算数・理科といった科目と同じとなり、6年生に至って道徳と国語、社会といった文化系科目と同じクラスターになる。これより、学年が上がるに従って、英語が他の文化系科目の一つと見なされていく傾向があることがわかる。

(2) 4技能のうち、どれをやってみたいかということについて、(i)書く>(ii)読む>(iii)話す>(iv)聞く、と回答した順で語彙習得が進んでいる傾向がある。——これは、4技能のうちのどれをやってみたいか、という回答と、語彙習得がどの程度進んでいるか、ということの関連性